昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一九一号）

慈光

第十七巻　第四号

目次

一切衆生悉有仏性（三）……近角常観……(1)
大悲無倦……花田正夫……(9)
念仏申さして貰うだけ……松村繁雄……(12)
観無量寿経について（一）……福島政雄……(15)

一切衆生悉有仏性 (三)

近角常観

今日は色々のことを申しますが、私はよく大菩提心ということを話す。この大菩提心の如きも、普通ならば、自分が仏に成りたいと求め、一切衆生を救いたいと願う心である。所謂、上求菩提、下化衆生が聖道門、自力の菩提心である。けれども我々そのような事出来ぬ、そのような平等大悲は思いも及ばれぬ。『和讃』には、

自力聖道の菩提心　こころもことばも及ばれず
常没流転の凡愚は　いかでか発起せしむべき
三恒河沙の諸仏の　出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども　自分かなわで流転せり

自力聖道の菩提心は、我々には駄目である。三恒河沙の諸仏の出世のみもとにありし時、大菩提心おこせども、自力かなわで駄目であった。

さすれば普通より言うならば、法然聖人が『選択集』にお示し下さる如く、我々は菩提心すらも及ばぬ者である。唯一向専念無量寿仏と、南無阿弥陀仏のお慈悲一つを頂くばかりである。

そこで親鸞聖人は、その南無阿弥陀仏を頂く、広大の信心は、このたびは、掌を反して、これが浄土の大菩提心であるとお示し下さる。『和讃』に、

浄土の大菩提心は　願作仏心をすゝめしむ
すなわち願作仏心を　度衆生心となづけたり

私共、自分で仏に成りたい、浄土に往生したいという願作仏心や人を救いたいなどという度衆生心は起らぬ。自分の身を成り立てたい、自分の身が長生きしたいという心ばかりで、早く極楽に参り仏に作りたい、などという心は先に立たぬ。

信仰に気の付くまでは、唯自分の苦を取りたい、早く楽になりたいという心ばかりで、この心が信仰を聞くもとになって居るのだから、この心が菩提心や、求道心などとは言えぬ。求道とは何かというに、我々人間が道を求める心でなく、仏の広大なるみ親が、この我々衆生を助けるために、親が願を起して我々を救いたいと種々に御苦労して下さる、その仏の願作仏心である。

毎々言うことでありますが、私が十年前、この学舎を命名する時、何からこの求道という文字を選び出したかという法蔵菩薩が世自在王仏のみ前で法を聞かれた時の『大経』の御言葉である、曰く。

爾の時、世自在王仏、その高明志願の深広なるを知ろしめして、即ち法蔵比丘のために、而も経を説きて言く、譬えば、大海を一人升量せんに、劫数を経歴して尚底を窮めて其の妙宝を得べきが如し。人こころを至し、精進にして道を求めて止まざることあれば、みなまさに尅果すべし。何の願か得ざらん、云々。

この世自在王仏の仰せを聞き、法蔵菩薩がこの私はじめ一同のため、仏に成りて救うて遣りたいとの願作仏心をお起し下された。この若不生者、不取正覚の本願を起し、仏に成るとの大悲心が、仏の願作仏心である。それが仏御自身のためでない。この願は、私を仏になさずば我も正覚は取るまい、仏とは名乗るまいとの本願なれば、即ち如来の願作仏心を度衆生心と云う。この遣る瀬なき如来の本願成就のお力が、とうど私如き、菩提心も起さず、自分の身のことばかり思う浅間しき心に届いて下され、今迄浄土に往こうの、人を救おうのという思いは毛頭なかった私の心が方角が逆さまになりて、やれ有難やと喜びの心が起る、これが仏の願作仏心、度衆生心が届いて下され、極楽に参らせて貰う思いである。その参らせて貰う思いが、はや既に浄土に往きて一切衆生を救わせて貰う度衆生心、願作仏心である。そこで『信巻』下巻の御言葉には、

真実の信心は即ち是れ金剛心、金剛心は即ち是れ願作仏心、願作仏心は即ち是れ度衆生心、度衆生心は即ち是れ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむるの心なり。是の心即ち是れ大菩提心、是の心即ち是れ大慈悲心なり。

このような、衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむるの心というようなありがたき度衆生心まで得させて頂くのである

以上は御文に出ている上からお話したのでありますが、この間も、先程言う『歎異鈔』の

「その故は弥陀の光明にてらされまいらするゆえに、一念発起する時、金剛の信心をたまわりぬれば、すでに定聚のくらいにおさめしめたまいて命終すれば、もろ〳〵の煩悩悪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり」

の御文、この信の一念に命終して、此世からはや既に無生忍を得るというこの御教化につき或る方が『勢至菩薩和讃』に、

われもと因地にありし時　念仏の心をもちてこそ
無生忍にはいりしかば　いまこの娑婆界にして
念仏のひとを摂取して　浄土に帰せしむるなり
大勢至菩薩の　大恩ふかく報ずべし

此の和讃に無生忍というお言葉がある。このことはどうか

とお尋ね下された。このことにつき、今繰り返し申しますが、親鸞聖人の無生忍の御左訓には、

フタイノクライトマフスナリ。カナラズホトケニナルベキミトナルナリ。

と斯く仰せられてある。無生忍とは、この世に居ながら、仏と成るべき身となり、未来衆生済度の出来る身となる事をいうのである。

今この『和讃』は聖人が『首楞厳経』によりて御製作なされたのであるが、勢至菩薩が、まだ仏と成り給わぬ前、まだ凡夫でましました其の時に、

「念仏の心をもちてこそ、無生忍には入りしかば」……南無阿弥陀仏を念じ、その念仏の力で無生忍に入り、悟りに往かれたというのである。

これは『首楞厳経』に、勢至菩薩の円通を説く処に斯く説かれてあるのであるが、その因地の勢至菩薩が、念仏一つで無生忍に入り、浄土に往生して一切衆生を御教化下されたのである。即ち「念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益する」事になるのである。

それ故、その勢至菩薩が再びこの界に現れ「いまこの娑婆界にして、念仏の人を摂取して、浄土に帰せしむるなり」である。先の「願作仏心は即ち是れ度衆生心、度衆生心は即ち是れ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむるの心なり」の御教化とぴたと合うのであります。

話が色々になりますが、この『勢至讃』は聖人が、法然上人の本地と仰せられたのである。即ちその勢至菩薩が再びこの世に現れ、念仏の衆生を摂取して、浄土に帰せしめて下さるが法然上人一代の御化導とお喜びなされたのである。斯く勢至菩薩が再び法然上人と現れ、この土のお互いを済度下さるは何がもとかというに「念仏の心をもちてこそ、無生忍には入りしかば」――その因地の時、念仏の一念に頂かれた度衆生心が、弥々極楽に往生なされて事実に現れたものが、法然聖人一代の化導である。勿体なけれども『和讃』に、

安楽浄土にいたるひと　五濁悪世にかえりては
釈迦牟尼仏のごとくにて　利益有情はきわもなし

法然聖人が斯くの如き一代の御教化も、釈尊が八十随形好を現じて衆生済度をして下された事も、勿体なき事なれどこの我々が頂く信心の一つに其のお力は下されてあるの故に、即ちこの信心は願作仏心である、度衆生心である。

「度衆生心は即ち是れ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむるのこころなり」

「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いずれも〳〵この順次生に仏になりて助け候うべきな

り」

この信心を頂く上は、未来浄土に往生して法然聖人の如く釈尊の如く、衆生済度をさせて頂くことが出来るのである。この広大の心でなければ「すえ通りたる大慈悲心」とはお示し下さらぬ。

又先程いう『信巻』下巻の御文には続けて、

是の心即ち是れ無量光明慧に由り生ずるが故に、願海平等なるが故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は即ちこれ仏道の正因なるが故に。

是の心は即ち是れ仏の無量光明慧の広大な恵みによりて頂かれるのである。先程云う平等心という事もここにある。上下の区別無く現れるが、如来の広大な平等の大悲心である。我々はお慈悲に気の付く一念、この広大な願海平等の悟りの心を得させて貰う。故に頂いたこの大慈悲心、即ち平等心である。此の広大な仏の大悲心を、我々凡夫が得させて貰うのである。「願海平等なるが故に云々」――ここはもう何とも口には言うに言われぬ。『和讃』に、

弥陀智願の広海に　凡夫善悪の心水も
帰入しぬればすなわちに　大悲心とぞ転ずなる
弥陀智願の海水に　他力の信水いりぬれば
真実報土のならいにて　煩悩菩提一味なり

もうここは大慈大悲極まりなき本願の海の中に、我等が信心を得させて貰う極所である。私は縁ありてこの間、この和讃の聖人の真筆を拝見した。それには「他力の信水」を「我等が信水」とお誌しなされてあった。何れにしても同じ事である。この如来より頂く我等が信心の水と、如来本願の願海の水とが別々でない。願海平等の慈悲の水が、即ち我等の心に頂いた他力信心の水である。故に「願海平等なるが故発心等し。に発心等しきが故に道等し」である。勿体なけれども仏が一切衆生を救うて下さると同様なる、我等が一切衆生を助ける発心、大慈悲心までもこの信の一念に下さるのである。この発心等しきが故に、悟りも、仏の悟りと同様の悟りを得させて下さるのである。この大慈悲心が即ち仏道の正因であるとのお示しである。

以上は『信巻』下の巻にある御文であるが、聖人は更に続けて『論註』の文をお引きなされ、

論の註に曰く。彼の安楽浄土に生ぜんと願ずる者は、ならず無上菩提心を発するなりとのたまえり。

外の事はない。この広大なる恵みを喜ぶ時に、はやこの広大なる浄土の無上菩提心は下されてあるのである。聖人はまた続けて、

又云わく。是心作仏とは、言う心は心能く作仏する也。

是心作仏という事を、この我々の心が直ぐ仏になる事と思うと大違いである。我々の心は悪業の塊りである。その悪業の胸の中へ、如来より御廻向の広大慈悲心一つ、この広大御廻向の親心一つにより、この悪業の身を仏になるべき身とさせて下さるのである。又続けて、

是心是仏とは、心の外に仏ましまさずとなり。譬えば火木より出でて火木を離るることを得ず。木を離れざるを以ての故に、即ち能く火を焼く。木火の為に焼かれて即ち火と為るが如しとのたまえり。

木で火をたくと、火の気の無い薪なれども、その火が木に着くと、其の木が燃えて灰になる。それと同様、我々の胸の中は煩悩の薪木ばかり、火の気というては更に無い。一切衆生悉有仏性という事は、初めより言う如く、決して我々の心に火があるという事ではない。我々の心は冷やかなる薪木ばかり、その煩悩の薪木の中に、大慈大悲の如来の、この私を見捨てぬという、御念力の塊りの心の火が移る一念に、八万四千の煩悩の薪木が燃えて皆火となる。我々の心はこの煩悩の薪木じやぞ、この親の我々を救わんという遣る瀬なき心が火であるぞ。その火がわがこの心に移る一念に、この悪業煩悩の心の外に、別に新に信心の種が這入るでない。この煩悩の薪木に火の移るなり、煩悩の薪木を焼き尽くして、薪木が火となるのじや、とお示し下されたのである。『和讃』には、

無碍光の利益より　威徳広大の信を得て
必ず煩悩の氷とけ　即ち菩提の水となる

浄土の大菩提心はこの煩悩の外に来るのでない。この煩悩の罪深きを哀れと見て下さる仏のお心、この心が届いて下さる一念に、悪業煩悩の氷融けて、浄土の大菩提心の水と転じ変えられるのである。冷やかなるかさ〳〵とした、手の着けられぬ煩悩悪業の我等が心の薪木に、たった一つなれども、その煩悩悪業が哀れじやという、其の遣る瀬なき如来の御念力、あなたのまこと心が、この罪深き私の心に届いて下さる一念に、あゝ如何にも遣る瀬なき広大のお慈悲であったと、火の燃え移るは、薪木から出る火じやなけれども薪木を焼く向うの広大の火の力故に、悉くこちらの煩悩悪業の薪木を焼き尽して、遣る瀬無き如来廻向の願作仏心、度衆生心、大慈悲心と、焔々と盛に燃える火じやぞよとお知らせ下さるのである。

○

私は此頃色々のものを見せて貰う。これは始終ここにお出で下さる竹原君が、親鸞聖人の真筆の写しがあるとて見せて下され、私がそれを写して来たのであるが、それは私の常に言う『涅槃経』の御文である。既に皆様はよく御承知の如く『信巻』に御引用なされてある『涅槃経』阿闍世王入信の処に、諸の仏弟子が偈を以て讃歎した文がある。その中の一節である。これは私の『懺悔録』の序文の中にも引いて置いたのでありますが、曰く、

如来は一切の為に、常に慈父母と作り給えり。当に知るべし、諸の衆生は、皆是れ如来の子なり。世尊大慈悲、衆の為に苦行を修し給うこと、人の鬼魅に著せられて、狂乱所為多きが如し。

実に有難き御文である。予て言う如く、私は親鸞聖人が度々書いて喜ばれた文に違わぬと、七年前、父に別れた時、父の遺愛の『仮名聖経』の帙の裏に、父がこの文を書いて置いたのを発見し、爾来、常にそう思うて喜ばせて貰うて居た。親が自分の子のために種々心配して狂気になり奔り廻る。それと同様に、仏はこの私を助けるために、あなたの大悲の胸を痛めて、今日まで待ち受けて下さる。その仏の遣る瀬なき思いは、人の親の鬼魅に著せられて、狂乱所為多きが如し、というのである。

私はどうも、これは一通りならざる文と其時知らせて貰い、聖人が分けて喜ばれた御文に違わぬと、以前より思うていた。処がこの前も言う如く、先般京都に寄りて、西本願寺の展覧会で、聖人が自筆の名号の下に、この御文を御記しなされてあるを発見した。

今度竹原さんに見せて頂いたのは、聖人が御弟子の善蓮に種々有難い文を集めて書いてお遣りなされた一巻の直筆の聖教の写しである。惜しい事にはその原本が何処にあるかわからぬ。写しなれども籠字で抜いたのであるから、御直筆そのままに出来て居る。原本の写しが下間家にあったのを、見せて貰い、更に又写したものであるそうである。この中に今の文が引かれてあるのである。

この文が実に有難いので、如来のこのお心が、如来の願作仏心、度衆生心のもとである。遣る瀬無き如来大悲は一切衆生を一人子と思召して下さる。「如来は一切の為に常に慈父母と作りたまえり。当に知るべし、諸の衆生は、……狂乱所為多きが如し」如来は実に我が為の慈父母じやぞと呼んで下さるのである。この罪深き者に、その親の親心を知らせんと、五劫永劫の御苦労をして下さるのである。

『歎異鈔』に

弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずるに、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思し召し立ちける本願の忝けなさよ。

と、この一つである。この外に頂く処はない。我々は煩悩が多い、罪が深いなどと、彼れ是れ自分勝手に苦しんでいるのであるが、仏はかねて其処を能く知ろし召して、その「そくばくの業を持ちける者を」と言って下さるのであ

る。

又『歎異鈔』の、

仏かねて知ろし召して、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときの我等がためなりけりと知られて、いよ〳〵たのもしく覚ゆるなり。

「煩悩具足の凡夫を」と言って下さるのである。「いずれの行も及ばぬ」その者をと言って下さるのである。

この遺る瀬なき如来の思召しの届く時、浄土の大菩提心を頂く。其の時が如来の私を救うとの、度衆生心を頂いた時である。これが一子地の心である。願海平等の心である。この如来の度衆生心、平等心を頂けば、この私が一切衆生を救う大慈大悲、生々世々の父母兄弟を救う平等の大悲に入らせて貰うたのである。十方衆生を一人子の如く思う一子地に入らせて貰うたのである。大聖釈尊の如く、一切衆生を済度する力まで、この時に頂くのである。

乍更、その力を頂くはこの一念に頂くのであるが、それは凡地にしてはさとられぬ。弥々この広大の御力の現れて下さるは、この世の命おわり、眼を閉じた時である。さりながら、命おわり、眼を塞ぐは、塞ぐ時塞ぐのではない。遺る瀬なき親心の火が、私の悪業の薪に燃えついて下さる、その一念に「善知識の言葉の下に、帰命の一念を発得せば、其の時をもて娑婆の終り、臨終と思うべし」である。この御慈悲の届いて下さる一念に、この肉体はこの世にありながら、長の迷いの命の根切をさせて貰うたのである。『正信偈』の中に、

善導独り仏の正意を明せり、　定散と逆悪とを矜哀して
光明名号の因縁を顕す。　本願の大智海に開入すれば
行者正しく金剛心を受く　慶喜一念相応の後
韋提と等しく三忍を獲、即ち法性の常楽を証せしむ。

遺る瀬なき如来本願の思召は、定散自力の善人も、五逆十悪の悪人も区別がない。皆一味平等にこの者を哀れみて下され「定散と逆悪とを矜哀して、光明名号の因縁を顕す」である。

南無阿弥陀仏の名号の父、八万四千の光明の母、この遺る瀬なき仏の大慈悲より、光明名号の大因縁を顕して、長々この者を待ちかねて居て下さる……この広大の御親心―世尊の大慈悲、衆の為に苦行を修し給うこと、人の鬼魅に著せられて、狂乱所為多き如し。……この広大の御親心、御苦労に私共一念気のつく時に、本願の大智海に入り込ませて貰う。その一念に「行者正しく金剛心を受く」である。

その金剛心は、即ち、願作仏心、度衆生心なること先程の文の通りである。

「慶喜一念相応の後、韋提と等しく云々」――其の罪深き者を可哀相と呼びかけて下さる如来広大本願の仰せが、

この私の胸に響くなり、あゝこの浅間しき者を哀みます広大の慈悲にましますかと、一念頂いたが、慶喜一念相応である。

その一念に、罪深き奴が、罪がなくなるのではない。今迄、それ程罪深いとは知らずに居たが、吾が身は現に罪悪生死の凡夫であったと気付かして貰う。その気付きし一念に、韋提と等しく三忍を得させて頂く。『歎異抄』第十四章の「すでに一念発起するとき、金剛の信心をたまわりぬれば……無生忍をさとらしめたまうなり」と同様である。

『観経』には、韋提希が無生忍を得る処に「廓然大悟、得無生忍」とある。廓然大悟と言えばとて、カラリと心の開く方を先に思うので無い。今まで長々なんのかんのと思うて来たが、何思うて居たのであったか。この悪い仕様の無い奴なればこそ、この者を救うとある御慈悲でないかと、わが心の善くない事を知れば知る程、弥々恵みの程を喜ばせて貰うが、喜、悟、信、の三忍を得、無生忍を得させて頂いた有様であります。

今日の講話は、甚だ前後混雑致し、意味の取り難きことならんと思います。『歎異鈔』十四章に、

この悲願ましまさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきと思いて、一生のあいだ申すところの念仏は、みなことゞく如来大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもうべきなり。云々。

『和讃』には、

如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も　骨をくだきをも謝すべし

南無阿弥陀仏

明治四十三年六月十二日。

一期一会

そも〳〵茶の湯の交会は、一期一会といいて、たとえば幾度同じ客、交会するとも、今日の会は再び帰らざることを思えば、実に我が一生一度の会なり。

主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れば、客も露地を出ずるに、高声に咄さず、静かにあと見かえり出で行けば、亭主は炉前に独坐して、一期一会すみて再びかえらざることを観念して、或は独服もいたす事、これ一会の極意の習なり。このころ寂寞として打ち語るものとては釜一口のみにして外に物もなし。

一世一度の覚悟を以て茶の湯をなす、何ぞ謹厳ならざるを得んや。無事に一度の茶の湯を果たす、何ぞ感謝の念なきを得んや。

大悲無倦

花田正夫

大分前、昨年の秋頃でしたか、テレビで九大医学部に新設された心療内科の紹介があり、その治癒例として、歩行不能になった子供の治療の実際が写し出されました。

その子は、生後何の異状もなく無事に生長していましたが次の赤ちやんが産れた頃から、足が動きにくくなり、それから漸次筋肉が硬化してスッカリ歩けなくなったそうであります。

両親の心痛は一方でなく、色々のよいという治療を、民間といわず病院といわずたずね廻つて試みましたが、どこも思わしくいかず、とう〳〵心療内科をおとずれたのであります。

そこで種々の調査が行われましたが、普通に考えられる脳腫瘍でもなく、また筋萎縮症でもなく、その原因がなかなかつかめなかつたのであります。

ところが或日、その子供にお母さんの絵を描かしますとその顔を鬼の面のような恐しいものに描きました。そこでこの子は母親に対して、何か強烈な欲求不満のあることが知れ、更に詳細に調査が続けられて、次のことがあきらかになりました。

この子は、次の赤ちやんが生れてから、その赤ちやんが弱かったので母親がそちらにかかりはてて、自分をかまつて貰えず、抱いてもらえない淋しさから、足を故意に動かさなくなり、親に抱き上げて貰うようにしました。こうしたことが続くうちに、足の筋肉が弱まり硬化して、本当に歩行出来なくなったのでした。

さてここまで原因をつきとめましたのち、この子に歩行させるためにどうしたらよいかと、病院で種々に研究された挙句、先ず母親から子供を離して入院させ、外部から筋肉を補強しやわらげるために足のマッサージを毎日二時間づつ続け、その時間中、

「〇〇ちやんは病気じやないの。ただ歩くことを忘れたの。サァ早く思い出して、優しいお母さんのところへ行きましよう」

という一句を看護婦さんが千遍、万遍、繰り返し〳〵語り続けたのであります。物心もつき、分別も出来る年齢の子

供であれば、説得することも容易でありますが、何分にも無分別な幼児のこととて、その子が聞いていようがいるまいが、眠つていようが、一切そうしたことにおかまいなしに、この一連の言葉を耳元で繰り返したのであります。

「いたつてかたきは石なり。いたつてやわらかなるは水なり。水よく石をうがつ、心源もし徹しなば菩提の覚道何事か成ぜざらん云々」

という古語もありますように、絶えず落ちてくる点滴がついには堅い石をうがつように、この言葉とそのこころが、無心の子供の心にしみこんで、肉体化する日まで、毎日々々続けられました。

何日か、何週間か、何月か続いた或日のこと、その子供が自分で起きあがろうとし始めたのを看護人が見つけ、そうなるともうしめたもので、あれこれと、なだめ、すかしはげまして、段々足にも力がつき、物を摑まえて歩けるようになり、遂にヨチ〳〵歩きが出来るまでになったので母親に会わせると

〃お母さん！〃

と呼びかけて、そのふところに飛びこんで行きました。その頃絵を描かしますと、お父さんとお母さんと自分とが手をつないでいるなごやかな絵をかきました。子供の心にうつつた鬼のような母の姿は、いつの間にか優しい母の像と転じたのです。

〇

私はこの子供の一部始終を聞きながら異様な感動に思わず目頭があつくなりました。

その幼児の身動きが出来なくなって、母をさえ鬼の如く恐しく感じる孤独地獄におちた子供の姿こそ、そのまんま私自身の醜い業繋の姿であります。——自分の罪業によって身動きも出来なくなって、世をのろい、親をもにくむというおそろしい鬼となっている姿であります。

この宿業にしばられるということにつきまして、卑近な例でありますが、寺などで法話会があります時、一度坐るとそこへ何時も坐りたくなって無意識のうちにひかれるのも宿業につながるせいであります。そのように一切の思いも行動も皆過去の業によって左右されているのであります。自分で自分の望むままに自由に行動していると思つていますが、そう思つている全体が宿業のあらわれであります。

私は山口県の或癩疾の方と大正の末頃に高知市で話し合つたことがありますが、その方の告白に「私は一切の希望を失つて四国に渡る船から飛びこみましたが、漁師さんにたすけられ、八十八ヶ所を巡つて室戸岬の上から再び海に飛びこみましたが、そこでも小学生に見つけられて救われ

ました。これによって、今までは自殺しようと思えば何時でも何処でも容易に出来ると思つていたのは間違いでした。私の業報のつきる日までは、死にたくても死ねません云々」と話されました。

聖人が「兎毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりもつくる罪の宿業にあらずということあることなし」と仰せになりましたのも宿業にしばられて微塵も動きのとれない身をお知らせ下さるのであります。

この宿業の綱に繋がれて、身から出た錆とはいえ、微塵も動きのとれぬ身に、絶えず、倦まず呼び続けられる大悲の声！あびせかけられる大慈の声！

釈迦弥陀二尊をはじめとし、高祖聖人とあらわれて、繰り返される愛語慈語の数々が、初めはよそごと、ひとごとと耳にだけ聞き流していたのが、段々と心の奥にしみこみやがて肉体化し、更に骨格化して、仏を信じよろこぶ心をおこされ、また念仏申される身にまでそだてあげて下さるのであります。

たしか三河のお園同行の逸話だったと記憶しますが、或日、所々方々を聞きあるき、種々の知識をたずねてもどうしても疑心の除かれない同行が遠くからお園さんをたずねて来ました。

その時お園さんは「おかまいなしのおへだてなし」という一句を何時でもくりかえして申しなさい、と勧めました。すると「こんな浅間しいままで、何もわからんままでよろしいのか」と問いかえしますと「おかまいなしのおへだてなし」と即座に答えたということであります。

さて私共の心底をかえりみますとき、へだて心ばかりであります。たまによさそうな心がおこりましても、相手がそれを喜ぶ間の親切で、その限界に達しますと、冷い心になってしまいます。こうした利己一点張りの心しか持合せのない私共にしてみますれば、仏様の利他深広の大悲心など感得しようにもそのよすがもないのであります。猫に小判、豚に真珠、馬耳東風と、全く受けつけ得ないのであります。

嗚呼この信心すらもおこし得ないで、疑惑の闇に沈んで孤独地獄に堕する者を、かねて見抜けばこそ「おかまいなしのおへだてなし」の愛語をお園さんは繰り返したのです。そこにお園さんの上に輝く如来善巧の大悲を今更に驚喜申すことであります。

念仏申さして貰うだけ

松村繁雄

本年は私、六十九才になりました。六十九といえば、富士山ならば九合九勺、残り一勺で頂上、其処が私の一生の終りです。

然るに私には「アト一勺」という実感がどうしても湧きません、実感があるようでもそれは観念にすぎません。「まだ〳〵二十年位は」という根性が勝つて「今宵限りかも知れぬ」という実感がどうしても起りません。然し九合九勺に登つていることは事実です。

一体どうしてこの様な油断をするのでしょう？私のこころというものは向うばかりを見て「現実」にはどうしても目が向かないのですね。猫は鼠を捕ることだけ考えて、「猫である」ということは一向に知らないと同様に「私」という奴は「あゝしたい、斯うしたい」ということだけを考えて足許は少しも知らないのですね。

私は今まで「無常」ということは肉体のことと考えておりましたが、当てにならぬのは肉体だけではなく、この「こころ」も全く当てにならぬのですね。

足許の現実、「無常」さえも知ることが出来ない、知つていると思うのは観念であって実感ではない。まことに、久遠の無智、盲目、恐ろしいのろま、それが私でありました。

それ程の馬鹿でありますから「罪悪」についても、口には「罪悪深重」と言うてもそれは観念であって実感ではありません。口には「地獄必定の悪人」「虚仮不実の愚人」と言うても、それは聞き覚えであって実感ではなく、いつの間にか「悪人ということを知つている悪人」になり、更に「悪人ということを知つている善人」になってしまいます。

「定水をこらすといえども識浪しきりに動き、心月を観ずといえども妄雲なお覆う」

と仰せられるお言葉を、今までは「定水をこらしても時に識浪が動き、心月を観じても時に妄雲が覆う」ぐらいの気持で聞き流しておりましたが、そういうことではなく、「定水をこらそうとしても識浪しきりに動いてこらし得ず心月を観じようとしても妄雲常に覆うて心月を観じ得ない」まことに仕末のつかない馬鹿、悪人、それが私であり

ました。

その馬鹿が、その悪人が、いつも世間様を批評しております。「人間というものは……」という立場に立つてものを言います。人間というものは……という時にはいつもおのれの馬鹿、おのれの悪人は忘れております。そうして「信仰がある」などと思いあがつております、本当に仕様のない馬鹿、その馬鹿が今度は六十九才になります。

今日もまた捧振り虫よ翌もまた　（一茶）

六十八年を馬鹿のままで歩いて、今日も亦馬鹿のままで過し、明日も亦馬鹿のままで……そのうちに「一生」が終ります。六十九才になったからとてこの馬鹿が革まるわけがありません。そのうちに死んで行かねばなりません。それだのに賢いつもりで平気でおります。念仏することさえも賢くなったつもりで「我に念仏あり」と誇つております。どこまでも〳〵「おれが、おれが」の驕慢の塊りであり、時には「愚かな奴、悪い奴」と頭の下がることがありましても、その途端に「おれは、おのれの愚を知つているような賢い奴」と、又しても驕慢が頭をあげます。ラッキョウはむいでも皮、むいでも皮、私は驕慢の皮のままで遂に一生を終つてしまいます。まことに一茶の

今日もまた棒振り虫よ翌もまた

それが私であります。

なぜそういうことになるのか？私は今まで、そういうことになりたくない、ならない方法はないものか、と考えておりましたが、ならない方法のないのが「私」でありました。猫の目には鼠が見えるだけ、欲の塊りの私には「ああして、斯うして」という欲しかなく、その貪欲のために我慢のために、昨日を今日を生きております。

悲しきは飽くなき利己の一念を持てあましたる男にあり　けり　　啄木

折角み仏の教に遇うておのれの愚悪を知らされても「人間はそういうもの」という観念で受取つて――物識りになって、道理は知ることが出来ても、どうしても愚悪の実感になりません。それは「愚悪にはなりたくない」という貪欲がはねのけて受付けないのです。よく〳〵考えて見ると私の貪欲のほしがつているものは、枯枝にとまっている鳥のようなものであって、つかまえようとしても逃げるもの捕えたとて役に立たぬもの、それだのにそれを捕えようとして毎日々々枯枝によじ登つております。そのうちに枯枝もろともボツカリ落下してしまいます。

そのような馬鹿はやめたい、やめたいけれどもようやめない底抜けの馬鹿、そこに「地獄必定ぞ」とのみ教がありました。その馬鹿を、その悪人を、今日も、今も、知つているぞ、待つているぞ、とのお呼声でありました。

願力の故に！まことの故に、その馬鹿に不思議にお呼声がとどき給うて、あら不思議や、その馬鹿の私の口から今は「ナムアミダブツ」が飛び出して下さいます。私はみ仏に抱かれておりました、呼ばれておりました、み仏の光の中におりました。

人間に生れさせて頂いたのも、そのみ光に遇わして貰うためでありました。六十八年の馬鹿の旅も、み仏に護られて、み仏の国に生れさせて頂くための旅でありました。

六つの花咲く身となりし今日までの御恩を道の小石に思う　　拙作

「腰かけた石を拝んで遍路立つ」しばし腰をかけた石さえも拝んで立つべきに、み仏に護られながら六十八年腰をかけさせて貰つたこの人生を拝まずにはいられません。何一つ報ずることは出来ませぬけれど、一足歩くもナムアミダブツ、一椀の飯もナムアミダブツ、子にも妻にもナムアミダブツ、一木一草ナムアミダブツ、善友にも悪友にもナムアミダブツ。

如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳は　骨を砕いても謝すべし

残りすくない人生、今日限りかも知れない人生、一日も半日も無駄にはなりません。拝むことを忘れてはなりません。そこに「我人生」がありました、私はみ仏に抱かれておりました。

南無仏と呼ばるるままに南無仏と答えて今日も南無仏と生く

昭和四〇年　年頭に立ちて

求法用心集

源通寺記

どうしても、こうしても、云うことを聞いてくれぬ奴じやということの知れるまでよく聞くのじや。

その心の鬼に勝ちたいという料簡ならあやまりというものじや。

○

この機は何処までも聞いてはくれぬ。また聞いてくれたら大変じや。御化導が虚言（うそ）になる。

万劫の仇じやもの、聞いてくれたならそれにだまされておそろしいことじや、定散心雑るが故に出離その期なしじや。聞いてくれぬ故、いよ〳〵「ただたのむべきは弥陀如来なり」ということを知らさせて貰う。

観無量寿経について（一）

福島政雄

阿闍世と私

今晩は観無量寿経に就いてお話しさせて頂きます。御承知の通りこの御経は浄土三部経の二番目の非常に大事な御経でありまして、昔からの御講師方の御講義の書物も沢山あるようでありますが、今晩お話し申し上げますのはそんな御講師方の色々の御解釈を参考にしてというような事ではありませんで、私自身がこの観無量寿経を読ませて頂いて、どんなことを感じておりますかというお話に致したいと思います。

御承知の通りこの御経は王舎城の悲劇という事で始まっております。

ビンバシャラ王と韋提希夫人とその間に生れた阿闍世、この親子の関係の何とも云えないひどい事から始つておるのであります。そうすると一応表面から見ますと、私共はこんな阿闍世王のようなひどい事はない、これはよっぽど例外のひどい事だ、我々はさすがにそこ迄は行つとらんと云うような感じが最初に起りますのであります。

ところが私が近角常観先生から始めて一週間も続いたお話を伺いました時、親鸞聖人の教行信証の中に出ております涅槃経の阿闍世王の入信の文、あそこを中心としてお話を伺いましたが、あの中に、阿闍世及び末世の者、阿闍世と同じ者というようなお言葉があったかと思うのであります。それとこれとだん〳〵考えて見ますと、私の問題でありますが、私は成程自分の父親を七重の奥の奥に閉じこめたりはいたしてはおりませんけれども、こういう事がありますのであります。私がかぞえ年の三十七才今から三十九年前のことでありますが、丁度その春西洋の方に行くことにきまりましてその準備をしておりました頃、私の父がもういよいよ駄目だという病気になっておりました。で病院に入院しておりまして私が始終容態をききにまいりましたけれども、私の心持がよほど冷たかったと思うのであります。それで父が政雄は自分の病気のことを一向心配していてくれないと申しました。その時に私が本当にすなおな心でありましたならば、黙つて自分の心持を悲しむとか、お父さんの云われる通り本当に心配もしていないですみませんとか言うようになるべきだったかと思うのでありますが

いきなり「いいえ心配しております」と、こう云うことを申したのであります。そればかりでなく、段々西洋に向いて出立する日は近づいてまいります、父親の容子はどうもよくない、そうしますと私は、父親がどうせ死ぬるものならば自分の出立する前に死んでもらいたい、こういう事を考えておりましたのであります。実際そこまで行きますと阿闍世王と変らぬということになりますのであります。

話がちよつと変りますけれどもフロイドという西洋の学者、精神分析学というのを始めた人でありますが、その人が大分ひどい事を云つております。と云うのは男の子というものは生れたその時から自分の父親を殺して母親を独占しようと云うような気持を持つている、女の子は又生れた時から自分の母親を殺して父親を独占したいというような心持を持つているものであると、この人はコンプレックスという言葉をつかいまして、このコンプレックスというのは心の中の病的なとどこおりの事を云うてあるようであります。だからつまり人間は生れるとすぐからそういう風なコンプレックス、病的なとどこおりを心に持つているものであると、そんな事をまあ書物で読んだり精神分析学を大いにやっている人から聞いたり致しますと、これはひどい事を云う人だ、西洋の学者はこんな事を云うだろう、自分は仏教のお育てを受けている、そんな事は西洋の病的な思想であって東洋の思想はちがうと云つて、自分はひとかど親に対していい心持を持つていると云うつもりでありましたのが、いよいよ父は死にそうだ、自分は西洋に出立しそうだというところまでせまってまいりますと、今申しましたようにどうせ死ぬなら出立前に死んでもらう方がいいというのは父親の死ぬるのを急がせるような心持でありますだからそうなってまいりますと阿闍世と同じ事になるという事を思いますのでありまして、この観無量寿経の一番始めのこのひどい物語はよそごとじや無い、涅槃経に阿闍世王ばかりで無く一切の末世の阿闍世王と同じ者の為にと云う釈尊のお言葉が出て来る、それは私自身に当るというような事を思いますのであります。つまりよそごとでは無いという事であります。

釈尊とお弟子の出現

それからビンバシャラ王・韋提希夫人の所にも富楼那尊者或は阿難尊者、目連尊者、などが空中を飛んでビンバシャラ王の前に来られますとか、それから釈尊御自身韋提希夫人の前に目連・阿難と一緒にあらわれておいでになる、これは空中をとは書いてありませんが兎に角ギジヤクツセンにいらした釈尊が韋提希夫人の前にあらわれておいでになる、私はこういうところを御経で空中を飛んでおいでになるとか、今のようにホーツとあらわれておいでにな

ったか

という所を読みますと、これはその人の心持、韋提希夫人なら韋提希夫人がかねて釈尊のみ教を聞いておられた、それがまあ謂わば腹の底に響いておつて、それがこの場合になって韋提希夫人の心持に生きて来たのであると、こう云う風に私は受け取つておりますのであります。

そう致しますともう一つ考えます事は、目連と阿難という事になっておるようでありますが、目連尊者は御承知の通りに神通第一であり、云いかえれば大いなる意志の人であります。それから阿難尊者と云えば情の人であります。だからこの二人が韋提希夫人の前にあらわれておいでになったと云う事は、かねて韋提希夫人が釈尊から聞いておいでになった、又この二人の尊者から聞いておいでになった事がこの場合に腹の底から生きた力となって浮かび出て来た、その事をこう云つてありますように感じますのであります。そうしてこの韋提希夫人は五体を地に投げて世尊の御慰(おあわれ)みを求めて懺悔をなされたという事になっておりますが、苦しみのドン底になって御自分の一切のおすがたを感じておいでになりますと共に、地にたおれて、そして世尊の光を御自身の心の中にお受けになった。世尊が眉間の光を放ち給うと云う所は、そのドン底まで苦しみが行つた時に世尊の智慧の光が韋提希夫人を照らし給うたのである、こう云う事を思いますのであります。だから私共の問題もそういう事でありまして、自分が苦しみのドン底まで行つて泣くに泣かれずというところ迄行きますと、この世尊の光を身に受ける、或は目連尊者の力、阿難尊者の情の慰めと申しますか、それを泌み〳〵と身に受けるようになる。そこの所をこう云うかたちで私にお教え頂いておるというような感じを持ちますのであります。

極楽の顯現

そうして韋提希夫人は色々の美しい世界を釈尊によって見せられて、しかし御自分としては極楽世界の阿弥陀仏のところに生れたいと云われますが、釈尊の御力であらゆる美しい世界を見せて下さつたというその問題でありますが、私は世界のありとあらゆる聖人とか賢人とかの教の世界というものはそんなものであろうと云う感じを持ちますのであります。そうするとそういう他の聖人賢人の非常に立派なみ教の世界がたくさんにありますけれども、併し私としてはどうしてもその教の通りに行けないという問題になつて来て、韋提希夫人の仰言つている通りに極楽世界の阿弥陀仏のみ許に生れたいと、こういう事になりますのであります。ビンバシヤラ王の方はなかなか賢い方でありましょう。閉じこめられていながら「心眼(しんげん)さわりなく」とあります。遙かに世尊を見奉つて頭面(ずめん)に御礼を申し上げて自然に

悟りを開かれたと云う事になっておりますが、韋提希夫人の方はなかなかそうは行かぬのであります。韋提希夫人の心がなかなか徹底されないという姿はやはり私自身にあるという感じを受けますのであります。そこに例の釈尊の御言葉「汝今知るや否や阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と。この御言葉だけ見ますと何だかそのあたり迄来ていらつしやると云う風に受け取れますけれども、そうでなくて、もう阿弥陀仏は韋提希夫人の心の中に徹しておいでになる、そう云う事を釈尊がこういう言葉で仰言つたのでないかと云う事を思いますのであります。

去此不遠

それじやその阿弥陀経に極楽はここを去ること十万億土西の方にあると、こう云う問題とどうなるかという理屈が其処にはいるところであります。けれどもどうでありましよう。十万億土西と云う事はどう云うことでありましようか。一応の解釈は舎利弗尊者、この方は智慧第一と云います。そう云う方を相手にお説きになる。そうすると信仰の世界と云うものは智の問題としてこれを考えると遙か彼方にあるという事だと、こう云う風によく解釈されますようでありますが、併し「西の方十万億土を過ぎて彼方に」と云うことは理屈の上でわかることでは無いのであります。理屈で考えれば西の方へ西の方へ行けば地球は元の所に帰つて来るじやないかと、こんな理屈も云えます。それじやそうでなくてこの地球の上に幅三尺位の丈夫な板をズラッと置いて東と西に無限に延べて見て、その上を西に向つて遙かに行くと云うように考えますとそれは今日の科学が示しますように宇宙の中にはいり込むのであって、そうなれば東も西もありやしないと、こんな理屈になるのでありまして、そんな理屈で到底解決の出来ない事であります。けれども併し、それは西と云うのは一切の光のおさまる所である、こう云うことでありまして、つまり極楽と云うものは本当の光を我が身に受けると云うそういう事なのでありまして、それを成る程頭でただ考えると遠いことの様であるけれども、自分のいよいよの苦しみと云う事になるとそれは遠いが近い、遠いけれどもすぐ目の前と云うよりも自分の中にある、こう云う事になりますかと思うのであります。だから「汝今知るや否や阿弥陀仏ここを去る事遠からず」と云うこの釈尊の御言葉は、苦しみのドン底におちいつた現実の人間に仰言る事でありまして、私共にとつてもその通りであります。頭で考えるとそれは遙か彼方であるかも知れないけれども実際の苦しみの問題になると今自分の問題である、こういう事でありましようかと思うのであります。

汝は凡夫なり

このあとに三ツの大事なこと、「三福を修すべし」と云うことを仰言つてあります。それが、ここに並べてある事が私共に実際出来ている事かと申しますと、第一番が「父母に孝養し」と云うようなこと全く行われていないと云うことになりますし、その第二第三に仰言つている事も実際私共には出来ていないのであります。そうでありますから今度は釈尊が韋提希夫人に「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば遠く見ることを得ず」とおつしやる、この心想羸劣、心に思う事もすっかり駄目になっているその韋提希夫人の現実の状態をさし示して、はっきりと仰言つて下さつている、それが同時に私に当たると云う事になりますのであります。

浄土のすがた

それから阿弥陀仏の極楽世界をどうしたら見ることが出来ますかと云うような問題になって来て、例の日想観から始まるのでありますが、夕日のずつと沈んで行こうとする時の海を見よ、そして眼を明けても閉じてもその日が自分の心の中にはっきりとあるように、ずつと夕日を見るがいいと云うことを仰言る。夕日を見るという事は西ということになって、光のおさまって行く世界を見よという事になります。これを始としまして、今度はその水がすっかり凍つてすっかり瑠璃色になった事を思えと云うような事から、だんだんお浄土の美しさという事を七重行樹、美しい木が並んでいる、美しい樹にはきれいな果物、金銀珊瑚と云うような果物がなっていると云うような事、功徳水の池というものがあってその池の水がそのきれいな樹を潤しているというような事が述べられてあります。

ここのところを私は今日汽車の上で静岡県にはいりまして山の木を見ますと、いっぱい密柑畑がありまして密柑の実が黄色になって非常にきれいに見えますし、それから一方の窓を見ますと東海の水が静かに落ち付いてそれこそ瑠璃色に見えますのであります。そこで私浄土という問題をここで考えさせられたのであります。一つこういう所から考えたのであります。西洋の哲学者、私はそんなに深く研究したのでもありませんけれども、スピノザというような哲学者は何と云いますか、汎神論と云いますか、世界の万物は神のあらわされた姿である、そう云うことを唱えられているようですが、そう云う汎神論というものが西洋にはありますところから、仏教をいい加減に見ている方は仏教も汎神論のようなところがあると云われるのであります。それは本当だろうかと云う事を私考えさせられたのでありますが、それはそうじやない、スピノザの汎神論の本当の深いところは私はわかりませんけれども、兎に角世界の万

物は神のあらわれであると云うような考え方と仏教の考え方とは大分ちがう。どう違うかと申しますと、私なら私が仏の御慈悲を身に受けて、今の密柑畑を見、東海の海を見る時に、そこに美しさを感ずると云うのは、私の心に受けたところの仏の御慈悲の照り返しと申しますか、そこで密柑畑の美しさを感じ海の波の美しさを感じます。何も密柑の木が仏のあらわれとは思いません。又海の波も仏様のあらわれとは思いませんが、併しながらその美しい密柑を見そのきれいな海の水を見ておりますと、お浄土という感じが、これはお浄土では無いけれども、お浄土の感じがそこに起る。其処、どうでございましようか、皆さん、この世がお浄土じやないけれど、私共が仏の御慈悲を身に受け仏の智慧の光を自分に照らされてまいりますと、そう云う美しいものを見ると其処にお浄土の光の照り返しと云うようなものを感じます。この世このままがお浄土では決してありません。苦しい所でありますけれども、併しながらそう云う美しい景色を見て其処にお浄土の光の照り返しを感じる、それは私前からそういう感じを持つているのであります。そこがスピノザの汎神論と全く違うのであります。この世の山の姿も花の色も美しい水の流れも皆神のあらわれと云う考え方と、そういう美しいものを見れば其処に私が身に受けている仏のこころ、仏のいのち、その光の照り返しをそこに感じてそういうものを縁として、其処にお浄土というものを感ずる、実はお浄土は仏様の御慈悲の中にある、私共が死ぬる時にさあ今から死にます十万億土を飛行機に乗つて飛んで行く、そんな問題じやないのでありまして、私が死ぬるその即座に、十万億土じやない仏の御慈悲の中におさめ入れられるのでありまして、浄土往生というのはそれなのでありまして、仏の御慈悲の中におさめ入れられて死んで行くと云うところに浄土往生、つまり私共近角常観先生から承つておりますが、御浄土というものをやたらに向うにおいて考えるのは間違いだ、仏の御慈悲のあらわれと云うものがお浄土である、だから仏の御慈悲をのけて浄土というものは無い、そんな事を仰言つたことが私の心の中に染みついておりますからして、つまりお浄土というものはそういうこの世の普通の考えでどうだこうだと云う事では無くして、今のような仏の御慈悲の中にある。

浄土の遠望

ところが私こういう事を一つ考えておりますがどうでありましようか。大無量寿経上巻のお浄土のところを読みました感じと、この観無量寿経のお浄土のことを述べられてあります所を読みました感じとが違うのであります。何と云いますか、大無量寿経の方だとお浄土全体の姿がそのまま落ち付いて目の前に見えるような感じを受ける。それか

らこの観無量寿経のお浄土、これを拝読してみますとお浄土を向うに遙かに見ていると云うような感じを受けますのであります。だからつまり大無量寿経の方のお浄土では、私自身がお浄土の中におつてそのあたりの風光を眺めさせて頂いていると云うような感じでありまして、それからこの観無量寿経の方は、成る程釈尊が「阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と仰言つた事はその通りであるけれども、仮りに浄土というものを遠くから見るような形で云つて見ればこういうことになる、そこが違うのであります。で又話が横に行くようでありますけれども、私の娘が二十六才で昭和二十五年の八月なくなりましたのでありますが、この娘の最後の言葉は「仏様が見える」という言葉であります。この娘は始終仏典に親しんでいたのではありません、うちで日曜学校のようなことをやつておりました頃よく手伝つてくれた娘でありますが、それがいよいよ最後という時に、「仏様が見える」という一言で死んで逝きましたから、何だか私はこの娘の往生は観経往生、観無量寿経のような往生というような感じを持つておりますのであります。その意味は今申します通りにお浄土を向うに眺めながら、阿弥陀仏ここを去ること遠からずだけれども、仮りにお浄土の姿を向うに眺めようならばかようかようである。大無量寿経の方はそうでなくお浄土の有様はこういうようである。

ドイツ人と問答

ドイツにおりましたおしまいの頃であります。南ドイツのシユワルツワルドという森林地方の奥の奥の方を、私がベルリンで世話になつた家の親類のおばあさんを訪ねて行つたことがあります。そのおばあさんの息子さんのお嫁さんという事にきまつていたその村で小学校の先生をしておられた方とそのおばあさんと一週間ばかり毎日々々話したのでありますが、私が親鸞聖人の信仰のお話をしましたらそのお嫁さんの方が胸をたたくようにして「仏教にそんな信仰がありますか、キリスト教の方でマルチン・ルーテルの伝えられた信仰と殆んど合うようなものじやありませんか」と云われたことがありますが、丁度私この本を持つて行つておりました。そしてそのお嫁さんが「それじやそのお浄土に生れたならばどんなものになるでしよう」と云われますからして、「それは何と云いますか、無極の体と極まり無き姿というようなものになります」と云うような事を、この御経の文句をかなわぬながらドイツ訳して云つてみましたら、「ああ成る程そうでありましよう」と云つて共鳴されたことがあります。そういうこともありますが、だからして大無量寿経の方のお浄土は、その中に私なら私というものが導かれてその浄土の有様を見せられているよ

うな、中にあつてお浄土を見るという風に感じますし、それからこの観無量寿経の方でありますと、今申しました通りにお浄土を向うに眺めさせて頂く、かよう〳〵である。実はそんなに眺めんでも釈尊がここを去ること遠からずと仰言つたその一言ですつかり尽きているわけでありますけれど、韋提希夫人が末世の衆生の為にどうか浄土の姿を見るその道をお教え下さいと言う事になつて、そうしてこう云う事を釈尊がお説きになる。こう読んでいると今申しますように、この地球上の美しいものを見て、そして私の胸に頂いている仏の御慈悲なり仏の智慧の光の照り返しを、そう云う地球上の美しいものに感ずると言うような風であります。そう云う心持であります。

渓声長広舌

そういたしますと有名な蘇東坡の詩に、谷川の水の流れの音というものが仏様の広長舌そのままであるというような詩がありますが、それが少しわかるように思うのであります。谷川の水の流れの声そのままが仏様の声とは云えないけれども、そこに仏様の声の、何と云いますか反響のようなものを感ずる、照り返しと云わずにこの場合音でありますから反響を感ずるというような事である。根本は自分の身に受けている仏の慈悲と智慧との光、或は慈悲の心の響き、それが根本であつて、そしてそこに自然の景色その中にそのこだまする仏様の響きを谷川の流れの上に聞く、こう云う事でありましよう。今の第六観と云うところまでが自然の景色と仏様の慈悲と智慧の光と云うものが、何と云いますか、融け合うようなそう云うところを示されているように感じますのであります。

住立空中

その次になりますと、例の有名な無量寿仏が空中にお立ちになつて観世音菩薩・大勢至菩薩が右左においでになる、それが韋提希夫人の目の前にあらわれておいでになつた。こう云うことになつておる有名な所であります。これは私真宗のお寺の御住職から承つたところでありますが、お寺の御本尊におまつりしてあるところの阿弥陀仏の像、そのお足を見てごらんなさい。そのお足は揃えたお足で無くて一歩踏み出そうとするお足になつているとうかがつております。私は一々御本尊のお足をしらべて歩いたわけじやありませんけれども、つまりそれは仏様がじつとしておられないで、この場合韋提希夫人の苦悩の有様を見てじつとしておられずに立ち上つて一歩踏み出そうとしておいでになる、そのお姿が住立空中のお姿であるとうかがつたのであります。この人生の苦しみ、私なら私の苦しみを見るに見かねて立ち上つて、何とかしなければならぬと云う仏の慈悲のお姿、それが空中に住立し給う、そして観世音と

大勢至とがそこについておいでになる。観世音は御承知の通りに仏様の御慈悲をあらわされた姿でありますし、勢至菩薩の方は仏様の智慧或は力とも云つてあるようでありますが、つまり仏様がその慈悲と智慧の力を以て苦悩の衆生の為にじつとしておられずに立ち上つておいでになる姿である。そのお姿、それは木像なり金仏なりの御姿でありますが、その御姿の上に、つまり私なら私がこの仏のそう云うお心持から出たところの空中住立の御姿の御心持を身に受ける、こう云うところで非常に有り難いところである。ある意味ではここの所が観無量寿経の中心になるような所ではありますまいかと云う事を思いますのであります。

それからその次が、これは皆様もお聞きになっております有名な釈尊のお言葉であります。

広大な如来

「諸仏如来は是れ法界身なり。一切衆生の心想のうちに入りたまう。是の故に汝等心に仏を想う時はこの心即ち是三十二相八十随形好なり。この心作仏す、この心これ仏なり。諸仏正徧知の海は心想より生ず」これは考え方で非常にむつかしいように私は思つていましたけれども、そんなむつかしい事じやないと云う事を今日感じましたのであります。と云うのは、第一「諸仏如来はこれ法界身なり」ここは一寸昔の方の御註釈を見てみたのでありますがなかなか面白く御解釈なさっています。法界身の法界とは一切衆生である、身とは仏のお体である、だから仏様は一切衆生の心の中にはいつて下さる、だから衆生が心に仏様を思う時にはその心がもう仏様のお姿そのままになる、その心は仏様になる心である、その心が仏様である。こう非常に鮮かな事を云つておいでになります。それを今のように汎神論からここを説明すると仏教も亦汎神論のようなものじやないか。諸仏如来は法界身である、この世界全体が諸仏如来のお体である。こう云いますと何だかスピノザの汎神論と似てるじやないかとちよつと思うところであります。併しそうじや無くて、一切衆生の心想のうちに入り給う、仏様は一切衆生、私であります、私の心の内にその慈悲と智慧とを以て私の心の奥底に触れて下さる、そうするとその私の心の内に仏様の三十二相とか八十随形好というお姿があるようなものだ、この心が仏様になったようなものだ、この心が仏様だとこう云つておいでになりますが、つまりそれは私の心に入り満ちて下さる。慈悲と智慧とを以て私の心に入り満ちて下さるところの仏様、それであると。それで汎神論とは違うのであります。そこの違う所をどうぞお考え下さいませんか。私は今日も汽車の中でその違う所を考え〳〵まいりましたのであります。前からここを大事な所だと思つて読んでおりましたけれども、ここはなかな

か六つかしい所、何か汎神論のように響く所じやないかと云うのが私の以前の考えであります。ところが今日感じましたところではそんな事じや無い。仏様が私のこの心の中に入り満ちて下さる、智慧と慈悲との力を以て入り満ちて下さる。それを簡単に申せば私の念仏する心である、こう云うことになります。

ふと浮かぶお念仏

お念仏と云うことに就いて私は前にも申しましたが、私が始めてお念仏申すようになりましたその時の有様は、今迄お念仏なんかを軽蔑しておりました私が近角先生の一週間ばかりの御話を承つて静かな自分の下宿に帰つて来ますと、自然と南無阿弥陀仏の称名念仏が浮んで来たのでありまして、あんな御話を聞いたから南無阿弥陀仏を申そうなんか思つたことじやありません。自然と浮んで来た、今だつてそうであります。それは御仏前に於いてお念仏申そうと思つて申す事は無論あります。けれども私の場合は、たとえば病院におります子供をこの十年間毎日行つて世話をしておりますが、その世話をして帰つて来る途中ホッとお念仏が浮んで来るのであります。子供の世話を今して来たから心が落ち付いたからこれから一つお念仏申そうなんか思つた事ありません。けれども帰りがけなどにホッとこう南無阿弥陀仏の称名が浮かんで来る。其処は私が念仏申すと云う事で無くて自然に仏の御心が私に届いて、そこに浮かんで来るお念仏である、こう云う風に私は感じているのであります。それがここで釈尊が仰言つている所ではありますまいかと思うようになりました。それでこれは決して汎神論で云うような考え方じや無い、苦しんでいる私が、そこに仏の智慧と慈悲とのいのちを身に受けて、そこに自然と浮かんで来るものであると、こんな事であります。それで今日は私汽車の中で、大変これは有り難いと云うような感じを起しましたことであります。

ここでちよっと休ませて頂きます。

未完

声が白道

源通寺記

声が道なり。声のかからぬところへは行けぬ。今度はお声が白道となるなり。

朝夕に口より出ずる仏をば知らで過ぎにしことのくやしさ

御声が親様である。活仏はこれじや。

南無阿弥陀仏　いま喚んで下さるる。

南無阿弥陀仏　また喚んで下さるる。

あとがき

天候の不順だつた初春もすぎて、野も山も新緑にいろどられて来ました。花祭りの行事もあちこちに催されて、誕生仏の生々とした微笑の御姿に人々の心は和ぎとひかりとあたたかみを覚えることであります。

法のみ山のさくら花
昔のままに匂うなり

と、讃仏の声も自然にくちずさまれることであります。

さて終戦二十年を経ました今日、道徳教育が学校で実施せられ、また期待される人間像ということが賛否まち〳〵の中にも提唱せられ、漸次考究せられて参りました。昨年道徳教育の本を数冊手にしましたが、その中で今迄は見られなかつたことで、ことに目立つことは、仏教やキリスト教のことが紹介されていることであります。戦前は教育勅語が根本で、それに高等教育をうける者には西洋倫理が中心に教えこまれましたが、宗教は「信教の自由」の名のもとに敬遠せられて来ました。その結果は文化人と呼ばれる多くの人々が無宗教だと高言するようになりましたが、今にして深く反省せしめられることであります。

「一切悉有仏性」近角先生の御講話は、信心即仏性であることを詳細にお説き頂きました。法然聖人の四十三歳の御時の述懐に「仏教に色々の宗派はあるが皆仏性を悟り顕すという一つで、皆同じであるが、自分は十悪愚痴の身に智慧はくらく、修行も及び難い、闇に道を迷うたようである云々」と仰せられ遂に「選擇本願の念仏こそ、かかる劣機のための唯一無二のすくいである」と随喜せられたことも思い併せられます。

観経の福島先生の御話は二回に分けて頂きますが、この経こそ、我等浄土往生の大先達の韋提希夫人を中心としての信味のひらけるところで、よく〳〵御精読下さい。

松村さんの六十九才の人生の一里塚とでも申せる原稿、「腰かけた石を拝んで遍路立つ」を印象深く知らされました。

ひとりでも行かねばならぬ旅なるを
弥陀にひかれて行くぞ嬉しき

蓮如上人

× × ×

御案内

○毎月廿一、二、三日曜日、午後一時半。
※ 一道会例会。
市電新郊通り一丁目下車東へ一丁半。

○毎月廿四日、午前午后、教西寺法話会。
市電御器所通り下車、桜花学園の東側。

○五月七日午后一時半、尾西市三条板倉、
※ 蓮光寺、修道会。バス、三条下車
歎異抄讃仰（廿四章）

定価 半年 二百円（送共）
一年 四百円（送共）

編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田正夫
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 本田政雄

発行所 振替口座名古屋一〇四七〇番 慈光社

慈光 第十七巻 第四号 昭和四十年四月十五日 発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可